

# 学習指導要領の改訂と小中学校の国語教科書が抱える課題

## Issues and Problems with the new Education Course Guideline and Kokugo Textbooks for Elementary and Junior High Schools

半田 淳子 HANDA, Atsuko

● 国際基督教大学  
International Christian University



### Keywords

新学習指導要領, 小中学校, 国語教科書, 伝統的な言語文化

new education course guidelines, elementary and junior high schools, *Kokugo* textbooks, traditional linguistic culture

### ABSTRACT

2008年に小中学校の「学習指導要領」が改訂され、国語科には従来の「言語事項」に代わって「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が加わった。その結果、これまでは中学校の教科書に採録されていた古典が、小学校でも採録されることになり、高等学校での古典学習も視野に入れ、義務教育課程の古典教育を見直す必要が出てきた。教科書には定番教材が繰り返し採録されているので、生徒たちが飽きないような指導上の工夫や、「音読」に偏らない授業展開、多様な学習活動の実践や、重複を避けた学習内容の連続性も考慮すべきである。

The Ministry of Education, Cultural, Sports, Science and Technology regularly reviews its basic curriculum for schools. The new education course guidelines for elementary and junior high schools were revised in 2008. The addition of ‘items related to traditional linguistic culture and characteristic of the Japanese language’ were included in the division of *Kokugo* (Japanese language education). As a result, Japanese classics must be taught in elementary schools as have been taught in junior high schools. The same famous classics of literature repeatedly appear in *Kokugo* textbooks of various grades, and it is necessary to consider new methods so as not to make students lose interest in classical Japanese.

## 1. はじめに

学習指導要領とは、教育課程の基準として、文部科学大臣が告示するもので、1961年以降、ほぼ10年ごとに改訂されている。2008年には戦後8度目の改訂が行われ、幼稚園および小中学校の新学習指導要領の内容が告示された。小学校では2011年度から、中学校では2012年度から既に全面的に実施されている。これを受けて、使用される教科書も新たに発行されたが、どのように内容が刷新されたかを具体的に考察した研究はまだない。

教科書には、文部科学省検定済教科書と文部科学省著作教科書の2種類があるが、本稿では前者の教科書を対象としている。「学校教育法」第34条に「小学校においては、文部科学大臣の検定を経た教科用図書又は文部科学省が著作の名義を有する教科用図書を使用しなければならない」と定められているように、すべての児童生徒は教科書を使用して学習する義務があり、この規定は、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校にも準用されている。

つまり、教科書とは、児童生徒の教育に直接かつ多大な影響を及ぼすものであると言える。また、小中学校一貫教育の増加に向けて、教科書の内容の連続性を検討することも必要である。本稿では、義務教育課程の国語教科書に焦点を当て、新学習指導要領と最新の国語教科書を分析し、どのような特徴と課題があるかについて明らかにしたい。

## 2. 学習指導要領の改訂と教科書

2006年に改定された教育基本法教育理念を受け、新学習指導要領では「生きる力」の育成を目指し、知識や技能の習得と、思考力・判断力・表現力の育成とバランスを重視することになった。結果として、授業時数は10%程度の増加となり、「脱ゆとり教育」に大きく舵を切ったと言える。また、各教科で、記録、説明、批評、論述、討論などの学習を充実させることが求められている。国語に関して言えば、従来の「言語事項」が「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に変

更になり、ことわざや慣用句の学習、古文・漢文の音読など古典に関する学習を充実させる方針が示された。「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」は、「伝統的な言語文化に関する事項」「言葉の特徴やきまりに関する事項」「文字に関する事項（中学校は、漢字に関する事項）」に分かれているが、本稿では、「伝統的な言語文化に関する事項（以下、伝統的な言語文化）」が、各社の小中学校の教科書でどのように扱われているかについて、分析し考察する。

小中学校の国語教科書を発行している教科書会社は、光村図書（以下、光村）、東京書籍（東書）、三省堂、教育出版（教出）、学校図書（学図）の5社である。三省堂は、小学校の教科書部門では新規参入である。『内外教育』（2010）によると、2011年度の小学校教科書の採択率は、光村が61.6%で、以下、東書が20.7%、教出が14.4%、学図が2.4%、三省堂が0.9%と続く。上位3社の順番は、中学校の教科書でも変わらず、『内外教育』（2011）によると、光村が63.8%、東書が13.8%、教出が12.7%、三省堂が6.5%（分冊との合計）、学図が3.1%となっている。つまり、小中学校ともに、光村の占有率が他社を大きく引き離している。

### 2. 1 小学校の教科書

小学校で使用されている国語教科書の名称（括弧内は、出版社名）は、以下の通りである。

『国語』（光村）

『新しい国語』（東書）

『小学生の国語』『小学生の国語 学びを広げる』（三省堂）

『ひろがる言葉 小学国語』（教出）

『みんなと学ぶ 小学校 国語』（学図）

光村は、1年生から4年生までは上下2冊の分冊だが、高学年は中学校に倣って1冊に統一されている。また、学年ごとに教科書に名前が付いているのも特徴で、1上は「かざぐるま」1下は「ともだち」2上は「たんぼほ」2下は「赤とん

ば」3上は「わかば」3下は「あおぞら」4上は「かがやき」4下は「はばたき」5年は「銀河」6年は「創造」である。独特な教科書構成で編集しているのは三省堂であり、2分冊構成ではあるが、上下巻になっているのは1年生までで、2年生以降は分冊の『小学生の国語 学びを広げる』を、『小学生の国語』と並行使用するような形になっている。東書、教出、学図の教科書は、従来通り、全学年を通じて上下巻である。

各社のHPには、編集の方針や趣旨が明らかにされている。それらによると、5社の教科書編集に共通する点は、基礎学力を重視し、特に読解力を育成し、国語に限らず広く活用できることを目指している点である。また、「伝統的な言語文化」に関しては、古典や伝統文化に「親しむ」ことと「楽しむ」ことに力点を置いている。

## 2. 2 中学校の教科書

中学校で使用されている国語教科書の名称（括弧内は、出版社名）は、以下の通りである。教科書会社は、小学校と同じである。

『国語』（光村）

『新しい国語』（東書）

『中学生の国語』『中学生の国語 学びを広げる』（三省堂）

『伝え合う言葉 中学国語』（教出）

『中学校 国語』（学図）

中学校の新学習指導要領の改訂のポイントも、基本的に小学校と同様である。各社のHPによると、編集の基本方針は、言語能力の育成を重視し、小学校で古典学習が開始されたことを視野に入れ、中学校ではどのように古典学習を掘り下げていくかに最も配慮し、教材や学習課題を設定している点が共通している。

光村は、書写との関連を重視し、古典の原文を毛筆による書き文字で掲載している。東書は、芥川龍之介や夏目漱石などの近代文学の名作を各学年に掲載し、作者や作品の歴史的な背景に触れることができるように、「専門家による書き下ろし

の文章」を積極的に掲載している。三省堂は、音読や暗唱を重視し、資料編『学びを広げる』に、「小倉百人一首」の全首（1年）や「古典の冒頭二十五選」（2年）などを収録している。教出は、古典の原文だけでなく、前後に解説文を入れて作品の全体像が把握しやすいように工夫し、「原文が読める・わかる」を目指して、現代語訳から原文で読む形へとステップアップする構成を取り入れている。学図のみ、他社のB5版ではなく、従来通りのA5版を採用している。編集方針も独特で、「交流」がキーワードになっている。国語科の目標を達成するためには、「テキストとのより深い関わり（交流）」が重要であり、「仲間の言葉や教材の言葉との深い「交流」を実現する授業が不可欠」としている。「伝統的な言語文化」に関しても、「手放しの古代礼賛、日本の伝統文化礼賛に陥らない学習、知識や教養の習得という水準からもっと踏み込んだ学習と受容を通じてこそ、伝統文化の優れた継承が実現する」としている。

## 3. 伝統的な言語文化に関する事項

### 3. 1 小学校の教科書

新学習指導要領では、「伝統的な言語文化に関する事項」として、各学年で以下の項目が加わっている。

第1学年及び第2学年：

昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。

第3学年及び第4学年：

(ア) 優しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。

(イ) 長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。

第5学年及び第6学年：

(ア) 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調

の文章について、内容の大体を知り、音読すること。

(イ) 古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。

これを受けて、各教科書では次のように対応している。以下、低学年、中学年、高学年の教科書の内容をまとめた表を提示する。

### 3. 1. 1 第1学年及び第2学年

「第1学年及び第2学年」は、教材として「昔話や神話・伝承」と記載されているので、『古事

記』の「因幡の白兎」（光村2上、東書2上、三省堂1下、教出2上）と「八岐大蛇（やまたのおろち）」（東書2上、学図2上）が人気である。『古事記』に由来する作品が教科書に登場してくるのは、『私たちの国語 2下』（秀英出版、1956）の「やまたのおろち」、『国語1 中学校』（日本書院、1962）の「いなばの白うさぎ」以来で、以前は中学校での扱いであった。また、「昔話」としては、定番教材の「笠地蔵（或いは、かさこ地蔵）」（東書2下、三省堂2、教出2下、学図2下）のほかに、「桃太郎」や「花咲か爺さん」が採択されている。

表1

		第1学年	第2学年
光村	上巻	● おむすびころりん	● きせつのことば「春がいっぱい」「夏がきた」 ● きいてたのしもう「いなばの白うさぎ」
	下巻	● きいてたのしもう「まのいいりょうし」 ● むかしばなしがいっぱい ● たぬきの糸車	● きせつのことば「秋の一日」「たのしい冬」 ● 聞いてたのしもう「三まいのおふだ」 ● ふろく「十二支のはじまり」
東書	上巻		● 言いつたえられているお話をしろう「でいたらぼっち」「いなばの白うさぎ」「やまたのおろち」「海さち山さち」
	下巻	● むかしばなしをたのしもう ● ふろく「むかしばなしをよんでもらおう」（花さかじい）	● むかし話を楽しんで読もう「かさこじぞう」 ● おばあちゃんに聞いたよ「十二支」「春の七草」「小の月」「いろはうた」
三省堂	上巻／本編	● おはなしきかせて	● むかし話を楽しもう「かさこじぞう」
	下巻／分冊	● むかしばなしをたのしもう「いなばの白ウサギ」	● 古典の世界「昔話を知ろう」（「ももたろう」「さるかに合戦」「ぶんぶく茶がま」「花さかじいさん」）「遊び」の昔 ● 読書の時間「古屋のもり」（坪田譲治）
教出	上巻	● おはなしのくに—おはなしをみつけましよう（かぐや姫、桃太郎、浦島太郎、猿蟹合戦、鶴の恩返しなど）	● むかしのお話を読む「いなばのしろうさぎ」 ● ふろく「わらべうた」（「かごめかごめ」「いちじくになじん」「通りゃんせ」）
	下巻	● むかしのおはなしをたのしむ「天にのぼったおけやさん」	● 昔のお話を楽しむ「かさこじぞう」
学図	上巻	● いろいろなおはなしをききましょう ● むかしばなしをよもう「うみの水はなぜしょっぱい」	● むかしの物語をたのしもう「ヤマタノオロチ」
	下巻		● かさこじぞう ● つづき落語ばなしを作ろう「けちなけちべえさん」

低学年の場合、児童が読むのではなく、教師による「読み聞かせ」が中心である。「花咲か爺」や「桃太郎」「浦島太郎」の挿絵を載せ、児童が粗筋を知っているかどうか、読んでもらいたいかどうかを聞いている（光村1下「むかしばなしがいっぱい」等）。教科書には、「付録」として本文が載っており、教師が読んで聞かせるようになっている。光村の「まのいいりょうし」（1下）や「三まいのおふだ」（2下）は、東北方言で書かれた民話である。一方、「おむすびころりん」（1上）や「たぬきの糸車」（1下）は読み物教材である。光村は、読み聞かせ教材と読み物教材をバランス良く収録している。

東書は、「昔話や神話」だけでなく、「伝承」として宇都宮の「でいたらぼっちのお話」を紹介している（「言いつたえられているお話をしよう」2上）。「でいたらぼっち」とは、巨人のことであり、日本各地に伝承が残っている。東書2上では、『古事記』の有名な話が紹介されているが、導入部だけで、残りは「先生に読んでもらったり、じぶんでさがして読んだりしてみましょう」となっている。2下の「十二支」の話も、「十二ひきのどうぶつは、どうやってきまったの」という孫娘の質問に足して、祖母が「むかし話にあるから、絵本で読んでみるといいね」と答えるにとどめている。児童の興味を喚起するねらいがある。

「いなばの白うさぎ」（光村2上）が読み聞かせ教材であるのに対して、三省堂1下の「いなばの白ウサギ」は読み物教材である。三省堂の場合、2年以上は2分冊構成になり、「ももたろう」「さるかに合戦」「ぶんぶく茶がま」「花さかじいさん」などは、発展的な教材として分冊の『学びを広げる』に紹介されている。分冊には、「古典の世界」という綴じ込みページもあり、昔話のほかに、2年生では『遊び』の昔が特集されている。

教出の「天にのぼったおけやさん」（1下）「いなばのしろうさぎ」（2上）「かさこじぞう」（2下）は、児童自身が読むようになっている。「いなばのしろうさぎ」の末尾には、「おもしろかったところはどこですか。話し合いましょう」とあり、「発表し合ったりすること」という学習指導要領の事

項と結びついた活動になっている。

学図は、5社の中では「神話・伝承」の採択に熱心ではなく、2上に「むかしの物語をたのしもう」として、「ヤマタノオロチ」が掲載されているのみである。「読み聞かせ」に関するページも少ない。一方で、特筆すべきは、他社に先駆けて落語を教材にしている点であり、指導方法も独特である。「つづき落語ばなしを作ろう」（2下）では、落語の「けちなけちべえさん」の最初の部分を紹介し、次にその後の展開を考えさせ、最後に続きの部分を紹介している。

### 3. 1. 2 第3学年及び第4学年

第3学年及び第4学年の「伝統的な言語文化」では、「文語調の短歌や俳句」「ことわざや慣用句、故事成語」が中心であり、指導としては「音読や暗唱をしたりすること」となっている。昔話や民話を中心だった低学年の教科書からすると、内容的にやや難しくなったような印象を受ける。3年の「モチモチの木」（斎藤隆介）と4年の「ごんぎつね」（新美南吉）は、旧教科書にもあった定番教材である。俳人では、松尾芭蕉、小林一茶、与謝蕪村が人気で、和歌では、百人一首の歌人のものが、明治以降の短歌では正岡子規、与謝野晶子、石川啄木の歌が中心に取り上げられている。その他、落語（三省堂4、教出4下）も教材として収録されている。主として、3年生で「俳句」と「ことわざ・慣用句」、4年生で「短歌」と「故事成語」を扱っている。

光村3上の「声に出して楽しもう」では、良寛の短歌や、松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶の俳句が見開き2ページで紹介されている。解説や口語訳は無く、末尾に「声に出しながら、一音ずつ手をたたいてみましょう」といった日本語の拍の形式に関する問いかけがある。「いろは歌」も載っているが、やはり解説などは付いていない。3下の「声に出して楽しもう」も同様の構成で、松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶の俳句のほかに、紀友則、安倍仲磨の和歌が掲載されている。また、「ふろく」に「百人一首を楽しもう」というページがあり、紀貫之、小野小町、持統天皇、天智天皇、



表2

		第3学年	第4学年
光村	上巻	<ul style="list-style-type: none"> <li>きせつの言葉「春の楽しみ」「夏の楽しみ」「秋の楽しみ」</li> <li>声に出して楽しもう（良寛、松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶、いろは歌）</li> <li>聞いて楽しもう「ばけくらべ」（松谷みよ子）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>きせつの言葉「夏近し」「夏さかん」</li> <li>声に出して楽しもう（小林一茶、与謝蕪村、松尾芭蕉、光孝天皇、山部赤人、蟬丸）</li> <li>付録「茂吉のねこ」（松谷みよ子）</li> </ul>
	下巻	<ul style="list-style-type: none"> <li>声に出して楽しもう（松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶、紀友則、安倍仲麿）</li> <li>きせつの言葉「冬の楽しみ」</li> <li>かるた（江橋崇）</li> <li>モチモチの木（斎藤隆介）</li> <li>ふろく「百人一首を楽しもう」（紀貫之、小野小町、持統天皇、清少納言、紫式部など）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>声に出して楽しもう（正岡子規、高浜虚子、中村汀女、石川啄木、与謝野晶子、佐佐木信綱）</li> <li>季節の言葉「秋深し」「春立つ」</li> <li>ごんぎつね（新美南吉）</li> <li>聞いて楽しもう「額に柿の木」（瀬川拓男）</li> <li>「ことわざブック」を作ろう</li> <li>ふろく「知ると楽しい「故事成語」（蛇足、五十歩百歩）</li> </ul>
東書	上巻	<ul style="list-style-type: none"> <li>慣用句を使ってみよう（ねこの手もかりたい、ねこのひたい、馬が合う、さばを読む、波に乗るなど）</li> <li>読書の部屋「じゅげむ」（物語）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「ことわざブック」を作ろう（さるも木から落ちる、ねこに小判など）「いろはかるた」「故事成語について知ろう」（五十歩百歩、漁夫の利、蛇足）</li> </ul>
	下巻	<ul style="list-style-type: none"> <li>俳句に親しもう（与謝蕪村、村上鬼城、小林一茶、松尾芭蕉、芥川龍之介、高野素十、正岡子規、橋本多佳子、高浜虚子、水原秋桜子、山口誓子）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「百人一首」を声に出して読んでみよう（能因法師、持統天皇、山部赤人、猿丸大夫、安倍仲麿、光孝天皇、紀友則、紀貫之、右京大夫頼輔、後徳大寺左大臣）</li> <li>木竜うるし（人形げき）</li> </ul>
三省堂	本編	<ul style="list-style-type: none"> <li>お話を聞こう「ききみずきん」</li> <li>声に出して読もう一俳句（松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶、正岡子規）</li> <li>カルタを作ろう（百人一首、いろはガルト）</li> <li>昔のことを聞いてきました（昔の遊び）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>落語一じゅげむ</li> <li>声に出して読もう一短歌（柿本人麻呂、紀友則、伊勢大輔、源実朝、良寛、橘曙覧、与謝野晶子）</li> <li>ごんぎつね（新美南吉）</li> <li>故事成語の物語（漁夫の利、矛盾、五十歩百歩、推敲）</li> </ul>
	分冊	<ul style="list-style-type: none"> <li>読書の時間「星取り」「いろは歌」「竹取物語」</li> <li>古典の世界「絵巻物を知ろう」「食事」の昔</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>読書の時間「小倉百人一首」「浦島太郎」</li> <li>古典の世界「落語を知ろう」「着物」の昔</li> </ul>
教出	上巻	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本語のひびきにふれる「俳句に親しむ」（小林一茶、与謝蕪村、高野素十、山口誓子、松尾芭蕉、正岡子規、中村汀女、炭太祇）</li> <li>ふろく「きせつと言葉」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本語のひびきにふれる「短歌の世界」（柿本人麻呂、藤原敏行、藤原定家、良寛、与謝野晶子、石川啄木）</li> <li>付録「月の名前」</li> <li>読書「谷間にかかったにじの橋」（今西祐行）</li> <li>文化「いろはうた」</li> </ul>
	下巻	<ul style="list-style-type: none"> <li>モチモチの木（斎藤隆介）</li> <li>日本の文化に親しむ「ことわざ・慣用句」（さるも木から落ちる、かつばの川流れ、弘法にも筆のあやまり等）</li> <li>ふろく「俳句を読もう」（小林一茶、松尾芭蕉、高浜虚子など）</li> <li>読書「ソメコとオニ」（斎藤隆介）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ごんぎつね（新美南吉）</li> <li>日本の文化に親しむ「故事成語」（漁夫の利、蛭雪の功、杞憂、とらの威を借るきつね、蛇足、矛盾）</li> <li>本の世界を広げて読む「ぞろぞろ一落語」（三遊亭円窓）</li> <li>夕鶴（木下順二）</li> <li>付録「百人一首」を読もう</li> <li>読書「寿限無」（落語）</li> </ul>
学図	上巻	<ul style="list-style-type: none"> <li>言葉のリズムを感じてみよう（俳句：与謝蕪村、小林一茶、田捨女）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>言葉から風景を想像しよう（百人一首：山部赤人、小式部内侍、能因法師、後徳大寺左大臣）</li> </ul>
	下巻	<ul style="list-style-type: none"> <li>モチモチの木（斎藤隆介）</li> <li>今と昔をくらべよう（今の遊びと昔の遊び）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ごんぎつね（新美南吉）</li> <li>言葉のいずみ「ことわざ・故事成語・慣用句」</li> </ul>

清少納言、紫式部など18人の歌人の歌が掲載されている。光村の中心は「音読や暗唱」であり、「ふろく」には、百人一首の楽しみ方や「おぼえ方のヒント」が紹介されている。4下には、「ことわざブック」を作るという活動が紹介されており、「ふろく」には故事成語として「蛇足」「五十歩百歩」の意味と由来、使い方が紹介されている。

東書は「音読や暗唱」にとどまらず、「伝統的な言語文化」の内容を調べ学習や書く作業、グループ活動に発展させている。3上の「慣用句を使ってみよう」では、「ねこの手もかりたい」を例に挙げて説明し、「馬が合う、さばを読む、波に乗る」など、13の「慣用句の意味を調べましょう」と指導し、その後、意味と使い方を書いた「慣用句カード」を作るという活動に展開させている。4上の「ことわざブック」を作ろう」でも、「さるも木から落ちる」「ねこに小判」など、ことわざの意味を辞書で調べるだけでなく、グループ全体で「ことわざブック」を作成する手順が詳しく説明されている。これらの活動は、学習指導要領の「長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと」に即しているだけでなく、四技能にも結び付いている点が評価できる。「俳句に親しもう」(3下)や「百人一首」を声に出して読んでみよう」(4下)も同様であり、「声に出して読んでみましょう」と指導するだけでなく、「春・夏・秋・冬それぞれの句の中からすきなものをえらんで、短冊に書き写し、「四季のしおり」を作ってみましょう」という活動に繋げている。

三省堂は、「声に出して読もう」という見開き2ページの扱いで、3年生で「俳句」を、4年生で「短歌」を掲載している。「俳句」は、松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶、正岡子規のものを2句ずつ紹介している。現代語訳や解説は付いていない。4年生の「短歌」は、柿本人麻呂、紀友則、伊勢大輔、源実朝、良寛、橘曙覧、与謝野晶子の歌が掲載されている。光村と同様、「音読や暗唱」を重視した形になっている。3年次には、「俳句」のほかに、「百人一首」を紹介した「カルタを作ろう」や、昔の遊びについて身近な人に話を聞き、

まとめて報告するという単元がある。「故事成語」は4年生になってからの扱いで、「漁夫の利」の物語を紹介し、「矛盾」「五十歩百歩」「推敲」に関して辞書で意味や成り立ちを調べ、物語を書くという活動につなげている。

教出は、「日本語のひびきにふれる」として、3上では俳句を、4上では短歌を扱っている。3上の「俳句に親しむ」では、小林一茶、与謝蕪村、高野素十、山口誓子、松尾芭蕉、正岡子規らの俳句が季節ごとに紹介されている。季語についての解説もある。冒頭に小学生が作った俳句が紹介されており、「みなさんも、俳句を作ってみましょう。「夏」といえば何が頭にうかびますか」という課題につなげている。4上の「短歌の世界」でも、柿本人麻呂、藤原敏行、藤原定家、良寛、与謝野晶子、石川啄木の代表的な作品と解釈を掲載するだけでなく、「心にしみてうれしかりけり(心にしみじみと感じてうれしかったなあ)」という言い方を使って、短歌を作りましょう」と指導している。教出は、「ことわざや慣用句、故事成語」の指導も充実しており、「ことわざ・慣用句」(3下)という単位では、「さるも木から落ちる」ということわざを使って友だちを慰めた話を紹介し、「かっぱの川流れ」「弘法にも筆のあやまり」「上手の手から水がもれる」や「ほねがおれる」「ほねみをけずる」「頭が上まらない」「頭をかかえる」などことわざや慣用句を20以上も紹介している。4下の「故事成語」でも、「五十歩百歩」「漁夫の利」の意味と成り立ちを紹介し、「蜚雪の功」「杞憂」「とらの威を借るきつね」「蛇足」「矛盾」について、「意味と成り立ちを調べましょう」「場面を考えて、実際に文を作ってみましょう」と指導している。

3年生で「俳句」、4年生で「短歌」という設定は、学図でも踏襲されている。「言葉のリズムを感じてみよう」(3上)では、松尾芭蕉や与謝蕪村、小林一茶や田捨女の俳句と簡単な解説が掲載されている。音読しやすく各句が分かち書きになっている。4上の「言葉から風景を想像しよう」も同様の分かち書きで、「百人一首」から山部赤人、小式部内侍、能因法師、後徳大寺左大

表3

		第5学年	第6学年
光村		<ul style="list-style-type: none"> <li>● 季節の言葉「春から夏へ」「夏の日」「秋の空」「冬から春へ」</li> <li>● 声に出して楽しもう「竹取物語」「枕草子」「平家物語」「論語」</li> <li>● 聞いて楽しもう「雪女」</li> <li>● ふろく「古典の世界」(「徒然草」高名の木登り)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 季節の言葉「春は、あたたか」「夏は、暑し」「秋は、人恋し」「冬は、春の隣」</li> <li>● 伝統文化を楽しもう「伝えられてきたもの」「狂言 柿山伏」「柿山伏について」</li> <li>● 聞いて楽しもう「河鹿の屏風」</li> <li>● 「とんぼ」の俳句を比べる</li> <li>● 『鳥獣戯画』を読む(高島勲)</li> <li>● 声に出して楽しもう「天地の文」(福澤諭吉)</li> <li>● 学習を広げる「古人のおくり物」狂言(附子, 神鳴, 二人袴) 落語(寿限無)</li> <li>● 俳句を作ろう</li> </ul>
東書	上巻	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 古文を声に出して読んでみよう(「竹取物語」「徒然草」「平家物語」)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 漢文を読んでみよう(「論語」「十七条の憲法」孟浩然「春曉」)</li> <li>● 詩と短歌を味わおう(与謝野晶子, 正岡子規など)</li> </ul>
	下巻	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 古文に親しもう「枕草子」(「春はあけぼの」「九月のつごもり, 十月のころ」「ふるものは, 雪」)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 子供句会を開こう</li> <li>● 伝えよう, 大切にしたい名言(「学問のすゝめ」)</li> <li>● 付録「伝統芸能に親しもう」(狂言, 人形浄瑠璃, 歌舞伎, 落語)</li> </ul>
三省堂	本編	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「狂言 しびり」</li> <li>● 句会を楽しむ(俳句を作ろう, 句会を開こう)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 自由な発想で—随筆—(「徒然草」「枕草子」)</li> <li>● 「なべ」の国の日本(渡辺あきこ)</li> <li>● 声に出して読もう—漢文—(『論語』)</li> <li>● 短歌を作る(俵万智, 正岡子規, 良寛, 与謝野晶子)</li> </ul>
	分冊	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 読書の時間「まんじゅうこわい」漢詩(「絶句(杜甫)」「春曉(孟浩然)」) 平家物語(冒頭部分)</li> <li>● 古典の世界「能・狂言を知ろう」「「住まい」の昔」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 古典を絵本で(『源平絵巻物語』『仮名手本忠臣蔵』など)</li> <li>● 読書の時間「枕草子」「徒然草」「おくのほそ道」</li> <li>● 古典の世界「歌舞伎・文楽を知ろう」「「学校」の昔」</li> </ul>
教出	上巻	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 日本語のひびきを味わう「漢文に親しむ」(孟浩然, 李白, 『論語』『大学』)</li> <li>● 付録「漢文を読もう」(蘇軾, 杜牧, 『論語』など)</li> <li>● 付録「文学碑をたずねて」(石川啄木, 斎藤茂吉など)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 日本語のひびきを味わう「春はあけぼの」(『枕草子』)</li> <li>● 付録「伝えられてきた作品」(『徒然草』『おくのほそ道』『アイヌ神謡集』『おもしろそうし』)</li> </ul>
	下巻	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 日本の文化を考える「「物語」を楽しむ」(『竹取物語』『源氏物語絵巻』『平家物語』)</li> <li>● 付録「古典」の言葉にふれよう(『更級日記』『源氏物語』『伊曽保物語』)</li> <li>● 読書「雨ニモマケズ」</li> <li>● 付録「附子(狂言)」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 日本の文化を伝える「言葉は時代とともに」(『坊ちゃん』『杜子春』正岡子規, 山部赤人, 柿本人麻呂など)</li> <li>● 付録「日本の名作」(『吾輩は猫である』『山椒大夫』『蜘蛛の糸』『小諸なる古城のほとり』)</li> </ul>
学図	上巻	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 和紙の心(町田誠之)</li> <li>● 言葉の文化に親しもう(『宇治拾遺物語』の「小野篁広才の事」)</li> <li>● 随筆を書こう わたし風「枕草子」(『枕草子』の「春はあけぼの」)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 言葉のリズムやひびきを楽しもう「文語詩を味わおう」(島崎藤村「やしの実」)「漢詩を味わおう」(高啓「胡隱君を尋ぬ」)</li> </ul>
	下巻	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 木竜うるし(人形劇)</li> <li>● 短歌・俳句を作ろう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 詩を書こう「連詩」を発見する(大岡信)</li> </ul>



臣の和歌を紹介している。末尾に、「富士山をよんだ歌、月の風景をよんだ歌などを集めて、発表し合いましょう」とある。学図は、「短歌や俳句」の「音読」が中心で、「ことわざや慣用句、故事成語」は4下の「言葉のいずみ」のみである。

### 3. 1. 3 第5学年及び第6学年

5年生及び6年生になると、教材として古文や漢文が登場してくる。採択の割合としては、8対2で古文が中心である。古文では『竹取物語』『枕草子』『徒然草』が、漢文では『論語』や漢詩（孟浩然の「春暁」など）が人気である。更に、高学年では、「近代以降の文語調の文章」も「内容の大体を知り、音読すること」となっている。夏目漱石の『坊ちゃん』や島崎藤村の文語詩「柳子の実」を採択している教科書（教出6下、学図6上）もある。また、光村6年と三省堂5年は、狂言を扱っている。古典ではないが、5年生では「大造じいさんとガン」（椋鳩十）が、学図を除く全ての教科書に採択されている。また、伝記も人気で、緒方洪庵（三省堂5年）、伊能忠敬（教出6年）、手塚治虫（東書5年）が紹介されている。

光村5年では、「声に出して楽しもう」として、『竹取物語』『枕草子』『平家物語』の冒頭部分が、現代語訳とともに紹介されている。作品についての解説も付いている。その他に、「ふろく」として「古典の世界」があり、『徒然草』の「高名の木登り」が収録されている。6年の「伝えられてきたもの」では、飛鳥時代から江戸時代までの古文の変遷を簡単に説明し、「狂言 柿山伏」では狂言の特徴について解説し、台詞とト書きを載せている。また、狂言師の山本東次郎の解説も掲載されている。「近代以降の文語調の文章」としては、福澤諭吉の文章が扱われている。光村の教科書には、「季節の言葉」として、春夏秋冬に分けて、著名な詩歌、季節に関わる言葉を紹介している。特に現代語訳や作品解説はなく、作品の「音読」が中心である。

東書は、5年で古文、6年で漢文を扱っている。5上では、『竹取物語』『徒然草』『平家物語』の冒頭部分が、現代語訳とともに紹介されている。

やはり「音読」が中心で、「くり返し声に出して読み、独特の文の調子を味わってみましょう」となっている。5下では、『枕草子』の「春は、あけぼの」の春の段を現代語訳とともに紹介し、「音読」以外に、「作者の感じ方や考え方について、現代のわたしたちと比べて考えてみましょう」としている。また、「九月のつごもり、十月のころ」と「ふるものは、雪」を「あはれなり」と「をかし」に着目させて、同じ光景に対する感じ方の違いを考えさせるという課題も出している。更に、「冬は、みかん」のように、「その季節にすばらしいと感じる身近なものごとを取り上げて、文章を書いてみましょう」と指導している。6上では、「百聞は一見にしかず」や「温故知新」のようなことわざや四字熟語の出典を載せ、更には、孟浩然の「春暁」を原文、書き下し文、口語訳で紹介している。漢文では、聖徳太子の「十七条の憲法」の一節「和を以って貴し」を掲載している点が独特である。「近代以降の文語調の文章」としては、6下で福澤諭吉の「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず」（『学問のすゝめ』）を紹介し、身近な大人に取材して、クラスで一冊の「名言集」を作るように指導している。

三省堂は、古典に関しては分量は多くないが、5年では、狂言の「しびり」を紹介し、狂言の歴史や型など特徴について解説している。孟浩然の漢詩「春暁」や『平家物語』の冒頭部分は、『学びを広げる』での扱いであり、原文と現代語訳が収録されている。6年になると、古文の『徒然草』と『枕草子』、漢文の『論語』が登場してくる。『徒然草』と『枕草子』は、冒頭部分を現代語訳とともに紹介するだけでなく、「随筆」という單元の中での扱いであり、前半は「随筆」とは何かという説明がなされている。また、説明文の「「なべ」の国、日本」は、全国のなべ料理の種類と歴史を紹介したもので、身近な話題で日本の伝統文化に興味を持ってもらう意図が感じられる。漢文は、『論語』の中から、「学びて時にこれを習う」「故きを温めて新しきを知る」など有名な一節を、書き下し文と現代語訳で紹介している。その他、6年では、良寛、正岡子規、与謝野晶子らの短歌

を例に取りながら、短歌の形式と題材、言葉の使い方について解説し、クラスで発表会を開くように提案している。

教出は、5上で漢文、5下と6上で古文、6下で近代以降の文章を扱っている。5上では、孟浩然の「春暁」の白文を載せ、漢文の書き下し文について説明している。漢詩のほかには、『論語』や『大学』の一節も紹介している。目標は、「声に出して読み、そのひびきを味わいましょう」ということであり、「付録」には、蘇軾や杜牧の漢詩や『論語』の書き下し文と現代語訳を掲載している。5下では、『竹取物語』や『平家物語』など、物語の冒頭部分を原文と現代語訳で紹介し、あわせて能や狂言、歌舞伎についても解説している。発展的な学習としては、「付録」に『源氏物語』の冒頭部分や、『伊曾保物語』の「はととありのこと」の話が、原文と現代語訳で紹介されている。6上になると、随筆（『枕草子』）や紀行文（『おくのほそ道』）を扱っている。『枕草子』では、「春はあけぼの」の季節感に注目させ、「気に入った「季節」を暗唱し、学級の人々と発表し合いましょう」と指導している。「付録」には、『徒然草』の序段と『おくのほそ道』の冒頭部分が原文と現代語訳で紹介されている。「近代以降の文語調の文章」としては、6下では、夏目漱石の『坊ちゃん』や芥川龍之介の『杜子春』の冒頭部分が引用され、文学史のような内容になっている。「付録」には、「日本の名作」として、漱石の『吾輩は猫である』や森鷗外の『山椒大夫』、芥川の『蜘蛛の糸』の冒頭部分が収録されている。

学図は、上下2冊構成であるが、古典を扱っているのは上巻のみである。分量的には他社に比べると少ないが、小学校で古典作品を扱う上での工夫が感じられる。作品の選び方も独特で、5上では、『宇治拾遺物語』の「小野篁広才の事」より、篁が「子」の文字が12書いてある紙の読み方に挑戦する話を紹介している。更に続いて、「古文の世界にふれる」という文章があり、漢文と古文の違いや、『宇治拾遺物語』について解説している。「随筆を書こう わたし風「枕草子」」では、定番の『枕草子』の「春はあけぼの」をベースに、随

筆を書くという活動にまで発展させている点が特徴的である。しかも、随筆を書くためのメモの作成や文章のサンプルなどが具体的に説明されている。最後は「できた作品を読み合って、その友達らしいなあと思ったところを発表し合いましょう」とあり、話し合い活動にまで発展している。6上は、文語詩と漢詩の扱いであり、文語詩では島崎藤村の「椰子の実」が掲載されている。漢詩は、高啓の「胡隱君を尋ぬ」で、白文と書き下し文のほかに、解説も付いている。独創的な教材は、大岡信の「「連詩」を発見する」で、連歌の発想をもとに、仲間と連詩を作って楽しむ方法が紹介されている。

### 3. 2 中学校の教科書

新学習指導要領では、「伝統的な言語文化に関する事項」として、各学年で以下の項目が加わっている。

第1学年：

- (ア) 文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること。
- (イ) 古典には様々な種類の作品があることを知ること。

第2学年：

- (ア) 作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむこと。
- (イ) 古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること。

第3学年：

- (ア) 歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと。
- (イ) 古典の一節を引用するなどして、古典に関する簡単な文章を書くこと。

これを受けて、各教科書では次のように対応している。以下、第1学年から順に検討する。

表4

	第1学年
光村	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 音読を楽しもう 「いろは歌」</li> <li>● 七夕に思う一語り継がれて、読み継がれてきたもの</li> <li>● 蓬萊の玉の枝―「竹取物語」から</li> <li>● 今に生きる言葉（「矛盾」「漁夫の利」「五十歩百歩」「杞憂」「塞翁が馬」「背水の陣」）</li> <li>● 季節のしおり「春」「夏」「秋」「冬」</li> <li>● 「江戸からのメッセージ―今に生かしたい江戸の知恵」（杉浦日向子）</li> <li>● 資料「言葉としぐさの伝統芸能―古典落語」（「時そば」）</li> <li>● 資料「坊ちゃん」（夏目漱石）</li> </ul>
東書	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 伊曽保物語（「犬と肉のこと」「鳩と蟻のこと」）</li> <li>● 竹取物語</li> <li>● 矛盾（「推敲」「五十歩百歩」）</li> <li>● 日本語のしらべ「月夜の浜辺」（中原中也）</li> <li>● 読書への招待「トロッコ」（芥川龍之介）</li> <li>● 資料編「古事記」「土佐日記」「伊勢物語」芭蕉・蕪村・一茶の句</li> </ul>
三省堂	<p>【本編】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 声に出して、さまざまな作品を読もう（持統天皇、紀貫之、在原業平、松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶、正岡子規、「枕草子」や「平家物語」の冒頭、孟浩然「春曉」、「論語」など）</li> <li>● 竹取物語</li> </ul> <p>【資料編】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 落語の世界</li> <li>● 京都・奈良紀行（和歌や俳句の舞台）</li> <li>● 詩の音読・暗唱（山村暮鳥、文部省唱歌「茶摘」など）</li> <li>● 読書の森へ「江戸の笑い 川柳」（興津要）</li> </ul>
教出	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 百年後、千年後の友人であるあなたへ―古典の扉を開く―（川柳／『東海道中膝栗毛』）</li> <li>● 物語の始まり―竹取物語―</li> <li>● 中国の名言―故事成語―（「矛盾」「大器晚成」「株守」「虎の威を借る狐」）</li> <li>● 読書「蜘蛛の糸」（芥川龍之介）「近代文学への誘い」</li> <li>● 落語「三方一両損」（三遊亭円窓）</li> <li>● 月と古典文学（小林一茶、『おくのほそ道』、李白「静夜思」）</li> <li>● 付録「ふしぎ」（金子みすゞ）「銀のしずく降る降る」（藤本英夫）「蓬萊の玉の枝とにせの苦心談」（田辺聖子）「トロッコ」（芥川龍之介）</li> </ul>
学図	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 読書「木精」（森鷗外）</li> <li>● 言葉の向こうに（古典解説）</li> <li>● 姫の物語？ 翁の物語？―竹取物語</li> <li>● とらわれた心に突き立つ矢―宇治拾遺物語</li> <li>● 故事成語（「五十歩百歩」「矛盾」）</li> <li>● 春秋の優劣―さまざまな古典</li> </ul>

### 3. 2. 1 第1学年

中学校の教科書には、各学年で古文と漢文の双方が掲載されている。どの学年にも定番教材が見られ、1年の古文では『竹取物語』、漢文では故事成語の「矛盾」が人気である。ただし、『竹取物語』は、既に小学校の高学年でも扱われていることから、冒頭部分以外の箇所を中心に据えている。また、学習の中心は、「文語のきまりや訓読

の仕方を知り、古文や漢文を音読」することである。高校1年でも文法を中心に『竹取物語』を扱うことが多いので、中学校では物語の全体像が把握できるような構成になっている。

光村の『竹取物語』は、まず、冒頭部分の原文と現代語訳を紹介した後、あらすじを確認し、五人の貴公子の一人が蓬萊の玉の枝を探しに行くという段を、原文に現代語訳を併記して掲載してい

る。その他、迎えが来てかぐや姫が月の世界に帰ったこと、帝が不死の薬を焼いたことなども紹介されている。目標は、「古典の文章（文語文・古文）を読み、興味や関心をもってその世界にふれる」「仮名遣いに注意したり、リズムを味わったりしながら音読し、古典の文章に読み慣れる」ことである。一方、漢文は、故事成語の「矛盾」を書き下し文と口語訳で紹介している。送り仮名や返り点、句読点や書き下し文など、訓読の決まりについても簡単に解説している。その他、「故事成語を使って体験文を書こう」として、「漁夫の利」を使った作文の例が載っている。

中学校の教科書で『伊曾保物語』を扱っているのは、東書のみで、「犬と肉のこと」「鳩と蟻のこと」という有名な逸話を原文と現代語訳で紹介している。『竹取物語』では、冒頭部分の引用と現代語訳に続き、五人の貴公子に与えられた難題が紹介されている。中心は、「仮名遣いや言葉に注意して、古文を読み味わう」ことだが、「作品に描かれた世界と現代とのつながりを考える」ことも課題として挙がっている。漢文の「矛盾」は、書き下し文と現代語訳で逸話が紹介されている。その他、「推敲」「五十歩百歩」「背水の陣」「蛇足」も例として挙がっている。

三省堂は、本編の冒頭部に「伝統的な言語文化」に関わる教材を配置している。持統天皇や紀貫之の和歌、松尾芭蕉や与謝蕪村の俳句、『枕草子』や『徒然草』『平家物語』の冒頭部分、孟浩然の「春暁」、漢文の『論語』などが、現代語訳とともに紹介されている。ただし、個々の解説はついておらず、音読が目的である。『竹取物語』は作品の解説に始まり、冒頭部分の原文と現代語訳、天人に迎えられ、月に帰る場面の原文と現代語訳、天の羽衣を着ると感情が失ってしまう件が収録されている。また、「私の本棚」として、江國香織の『竹取物語』や杉浦明平の『今昔ものがたり』が紹介されている。

教出は、同じ古文でも、江戸期の『東海道中膝栗毛』を最初に扱っている。まず、川柳を紹介しながら歴史的仮名遣いに触れ、その後、『東海道中膝栗毛』の方広寺大仏殿の場面の話を原文で紹介

している。中心は音読で、「弥次郎兵衛と喜多八との会話を、配役を決めて声に出して読み合おう」とある。『竹取物語』も扱われており、冒頭部分に続き、ところどころに粗筋を挟みながら、三省堂とはほぼ同じ場面を収録している。歴史的仮名遣いや古語についても若干の解説がある。音読が中心だが、「古文で書かれている部分をノートに書き写し、音読しよう」となっている。漢文は、定番の「矛盾」が書き下し文と現代語訳とともに掲載されている。教出では、漢文の訓読法についても、多くのページを割いており、「大器晩成」「株守」「虎の威を借る狐」を例にとって説明している。

学図は、「時を超えて」という大単元に古典をまとめて紹介している。その扱いは独特で、まず、なぜ中学校で古典を学ぶかを説明した「言葉の向こうに」（古典解説）が付いている。定番の『竹取物語』や「矛盾」も収録されているが、単なる紹介や音読ではなく、内容を深く考えることを要求している。「姫の物語？ 翁の物語？」という単元名が示すように、『竹取物語』の主人公は、実は竹取の翁ではないかと生徒に問いかけている。紹介している場面も、求婚を拒み続けたかぐや姫が、帝の深い愛情に触れて、心を開いていく場面を中心に扱っている。『宇治拾遺物語』は、「法華経」の修行をしていた法然の前に、普賢菩薩が白い象に乗って現れたという話をもとに、「法華経」を信仰する聖の話を紹介している。学図では、内容を比較し、独自の視点で分析することを要求しており、『法然上人絵伝』の絵は当時の人々のどのような考えに基づいているか、それに対して『宇治拾遺物語』に表された考えはどう違うか、話し合おう」となっている。漢文の「故事成語」も、「五十歩百歩」と「矛盾」を扱っているが、活動としては「孟子のたとえ話で、二人の兵士の行動に大差がないのはどのような点か」など、内容に関する質問が多くなっている。

### 3. 2. 2 第2学年

2年生の古典の定番教材は、軍記物語の『平家物語』である。扱われている箇所は、「扇の的」

表5

	第2学年
光村	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 季節のしおり「春」「夏」「秋」「冬」</li> <li>● 枕草子</li> <li>● 新しい短歌のために（馬場あき子）</li> <li>● 短歌十二首（窪田空穂，若山牧水，石川啄木，木下利玄など）</li> <li>● 音読を楽しもう「平家物語」</li> <li>● 扇の的―「平家物語」から</li> <li>● 仁和寺にある法師―「徒然草」から</li> <li>● 漢詩の風景（孟浩然「春暁」，杜甫「絶句」，李白「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」）</li> <li>● 資料「古典芸能の世界―能・狂言」</li> </ul>
東書	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 枕草子（「春はあけぼの」）</li> <li>● 徒然草（序段，「仁和寺にある法師」）</li> <li>● 平家物語（「那須与一」）</li> <li>● 古典芸能に親しもう（「高砂」「義経千本桜」「楼門五山桐」）</li> <li>● 漢詩（杜甫「春望」，李白「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」）</li> <li>● 日本語のしらべ「落葉松」（北原白秋）</li> <li>● 読書への招待「坊ちゃん」（夏目漱石）</li> <li>● 資料編「清少納言と紫式部」（三角洋一）「漢詩の世界」（日原傳）</li> </ul>
三省堂	<p>【本編】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 枕草子・徒然草（「うつくしきもの」「五月ばかりなどに」／「仁和寺にある法師」「ある人，弓射ることを習ふに」）</li> <li>● 漢詩の世界（李白「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」，杜甫「春望」「絶句」）</li> <li>● 平家物語（「敦盛の最期」）</li> </ul> <p>【資料編】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 狂言の世界</li> <li>● 平家物語紀行</li> <li>● 詩の音読・暗唱（高村光太郎，茨木のり子，王維など）</li> <li>● 読書の森へ「狂言 柿山伏」</li> </ul>
教出	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 直実の流した涙―平家物語「敦盛の最期」―</li> <li>● 随筆の味わい―枕草子・徒然草（「春はあけぼの」「うつくしきもの」／「仁和寺にある法師」「ある人，弓射ることを習ふに」）</li> <li>● 孔子の言葉―二千五百年からのメッセージ―</li> <li>● 読書「坊ちゃん」（夏目漱石）「近代文学への誘い」</li> <li>● 歌舞伎「外郎売り」</li> <li>● 古典の中の擬態語・擬声語（山口仲美）</li> <li>● 付録「扇の的―平家物語」「的―『新平家物語』より」（吉川英治）</li> </ul>
学図	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 読書「坊ちゃん」（夏目漱石）</li> <li>● 言葉の力（古典解説）</li> <li>● 源平争乱の歴史語り―平家物語（「敦盛の最期」）</li> <li>● 人の世と人の心のスケッチ―徒然草（「高名の木登り」「猫又」）</li> <li>● 論語</li> <li>● 言葉に託された心―作者の思い（「古今和歌集」の序文，「源氏物語」）</li> </ul>

か「敦盛の最期」のいずれかであるが，5社すべての教科書で『平家物語』が採択されている。これは，学習指導要領の2年次の目標が単なる音読ではなく，「作品の特徴を生かして朗読する」となっていることに関連している。「古典に表れたものの見方や考え方に触れ」という観点からは，

随筆も人気で，『徒然草』が5社に，『枕草子』が4社の教科書に採択されている。『徒然草』では，岩清水八幡宮に詣でた「仁和寺にある法師」（第52段）が人気で，4社に採択されている。『枕草子』は，「春はあけぼの」（第1段）と「うつくしきもの」（第145段）が定番である。漢文では漢詩



が、4社の教科書に掲載されている。これも、「朗読」がねらいで、杜甫の「春望」や「絶句」、李白の「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」が人気である。なお、学図は、3年生になってから『枕草子』と漢詩を扱っている。

光村は、『枕草子』の冒頭部分を原文と現代語訳で紹介した後、「自分の季節感を表す文章を四百字程度で書いてみよう」と指導している。『平家物語』は、まず「音読」として冒頭部分が紹介され、その後、「扇の的」の話が原文と現代語訳で説明されている。『徒然草』も同様に、まず序段が原文と現代語訳によって紹介され、その後「仁和寺にある法師」の話が、原文と口語傍訳で紹介されている。石川忠久の「漢詩の風景」では、孟浩然の「春暁」、杜甫の「絶句」、李白の「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」が訓読文と書き下し文で紹介され、詩人と作品に関する解説も掲載されている。その他、杜甫の「春望」も収録されており、絶句や律詩といった漢詩の形式について補足説明がなされている。

東書も、『枕草子』『平家物語』『徒然草』に関しては、光村と同様の箇所を採択している。漢詩は、李白の「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」の他に、杜甫の「春望」の訓読文と書き下し文を載せている。中心は、「二編の漢詩を繰り返し朗読し、暗唱してみよう」である。「古典コラム」には、絶句や律詩などの漢詩の形式についての説明もある。

三省堂は、『枕草子』と『徒然草』は同じ単元で、冒頭に「筆者が人間や自然についてどう思っていたのか、現代の私たちと同じ点や違っている点を考えよう」と目標が示されている。『枕草子』は「うつくしきもの」や「五月ばかりなどに」を、『徒然草』は「仁和寺にある法師」や「ある人、弓射ることを習ふに」といった定番教材を、それぞれ原文に口語訳を添えて紹介している。「漢詩の世界」では、李白や杜甫の定番の詩を訓読文と書き下し文とで紹介している。「漢詩の中に描かれた情景や作者の心情などを想像しながら、朗読を工夫して、その世界を味わおう」と冒頭に示されているが、各詩の解説や内容に関する設問は

ない。一方、「敦盛の最期」を扱った『平家物語』には、「熊谷次郎直実の行動や心情について、次の観点（注：大將軍を見つけたときの気持ち、「助けたてまつらばや」と思った理由）からまとめ、話し合おう」と、内容に関連する質問が載っている。

教出の古典は、収録されている作品が三省堂とほとんど同じである。『平家物語』は、冒頭部分を原文と現代語訳で紹介し、「敦盛の最期」の粗筋を説明し、本文と現代語訳を載せている。学習の中心は、「言葉の響きやリズムなどに注意して朗読する」ことである。『枕草子』や『徒然草』も、原文に口語傍訳を添え、単元の最後に作品の解説を載せている。「付録」では、本編では扱えなかった「扇の的」の原文と現代語訳、吉川英治の訳文が載っている。漢文に関しては、「学びて時に之を習ふ」「己の欲せざる所、人に施すこと勿れ」といった『論語』の有名な一節を、「朗読」教材として採択している。教出には、「伝統文化と言語」という大単元があり、歌舞伎の「外郎売り」や、「古典の中の擬声語・擬態語」を掲載している。

学図の『平家物語』は、定番の「敦盛の最期」を収録し、「繰り返し音読し、暗唱しよう」と指導している。「敦盛と直実を対比しながら、それぞれの人物像」について、装い、年齢、容貌、趣味、振る舞い、言葉遣いなどの観点から、表にまとめることになっている。他社の教科書に比較して、内容を理解し、考えを深めることを重視しているように見受けられる。学図も、漢文は漢詩ではなく『論語』を掲載しており、「吾十有五にして学に志す」「学んで思はざれば」などが掲載されている。句法に関しては、やや踏み込んだ扱いで、「音読して漢文の訓読に親しみ、助字の働きを知ろう」とある。

### 3. 2. 3 第3学年

3年生の古文は、『奥の細道』と『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』が定番教材であり、全ての教科書に掲載されている。百人一首に紹介されている和歌が中心で、生徒たちにとっては馴

表6

	第3学年
光村	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 季節のしおり「春」「夏」「秋」「冬」</li> <li>● 高瀬舟（森鷗外）</li> <li>● 音読を楽しもう 「古今和歌集」（仮名序）</li> <li>● 君待つと一万葉・古今・新古今</li> <li>● 夏草―「おくのほそ道」から</li> <li>● 関連教材「古典の伝統」</li> <li>● 学びて時にこれを習ふ―「論語」から</li> <li>● 資料「受け継がれる物語―「史記」と「項羽と劉邦」</li> <li>● 資料「古典芸能の世界―歌舞伎・浄瑠璃」</li> <li>● 資料「古典・近代の名作」</li> </ul>
東書	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 万葉・古今・新古今</li> <li>● おくのほそ道（「旅立ち」「平泉・中尊寺」）</li> <li>● 論語</li> <li>● 古典の言葉を味わおう（「古事記」「枕草子」「孟子」など）</li> <li>● 日本語のしらべ「初恋」（島崎藤村）</li> <li>● 読書への招待「最後の一句」（森鷗外）</li> <li>● 資料編「恋の歌」（鈴木健一）「「おくのほそ道」の旅」（深沢了子）</li> </ul>
三省堂	<p>【本編】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● おくのほそ道（松尾芭蕉）</li> <li>● 中国の古典の言葉</li> <li>● 森鷗外「高瀬舟」</li> <li>● 好きな和歌を紹介しよう（『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』より）</li> <li>● 初恋（島崎藤村）</li> </ul> <p>【資料編】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 能・歌舞伎・文楽</li> <li>● おくのほそ道紀行</li> <li>● 詩の音読・暗唱（室生犀星，中原中也，杜牧など）</li> <li>● 読書の森へ「吾輩は猫である」（夏目漱石）</li> </ul>
教出	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 旅への思い―芭蕉と『おくのほそ道』（「旅立ち」「平泉」「立石寺」）</li> <li>● 和歌の調べ―万葉集・古今和歌集・新古今和歌集</li> <li>● 春の山河―漢詩を味わう―</li> <li>● 初恋（島崎藤村）</li> <li>● 読書「最後の一句」（森鷗外）「近代文学への誘い」</li> <li>● 狂言「しびり」</li> <li>● 古典の歌，現代の歌（佐佐木幸綱）</li> <li>● 付録「古典名作冒頭集」</li> </ul>
学図	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 読書「少年一海」（芥川龍之介）</li> <li>● 歌の源流へ―万葉集・古今和歌集・新古今和歌集</li> <li>● 発見する言葉―枕草子</li> <li>● 漢詩（杜甫，王維，李白）</li> <li>● 言葉が見た風景―おくのほそ道</li> <li>● 異界を捉える言葉―遠野物語（抄）</li> </ul>

染み深い作品が多く含まれている。漢文は『論語』であるが、2年次に『論語』を扱った教出や学図は、代わりに漢詩を掲載している。明治以降の文語文としては、森鷗外の「高瀬舟」や「最後の一句」、島崎藤村の「初恋」を取り上げている教科書が多いが、これらも定番教材である。3年次の

「伝統的な言語文化」では、「古典の一節を引用する」などして、古典に関する簡単な文章を書くことが含まれているが、感想文や鑑賞文を書くことが中心である。

光村は、和歌の目標として、「和歌に表れた昔の人の心情や情景を読み取る」「和歌の効果的な

表現や語句の使い方を読み味わう」を掲げている。枕詞や序詞、掛詞といった表現技法に関しても簡単に説明している。『万葉集』では、持統天皇、柿本人麻呂、額田王、山部赤人、山上憶良、大伴家持、東歌、防人歌を、『古今和歌集』では、紀貫之、藤原敏行、小野小町、『新古今和歌集』では、西行法師、藤原定家、式子内親王の和歌を扱っている。『おくのほそ道』は、冒頭部分の「旅立ち」の場面が採択されており、原文と現代語訳を掲載している。その他、「平泉」の段は、原文のみが掲載されている。書く活動としては、「お薦めの古典を贈ろう」があり、「古典の言葉を引用して、思いを伝える文章を書こう」となっている。テニスの地区大会を控えた友人に、額田王の「熟田津に」の歌を贈り、励ます手紙を書くという例が紹介されている。『論語』は、「学んで時にこれを習ふ」「故きを温めて新しきを知れば」など、四つの孔子の言葉が、訓読文と書き下し文で紹介されている。

東書の和歌は、『万葉集』の柿本人麻呂、額田王、山部赤人、山上憶良、大伴家持、東歌、防人歌、『古今和歌集』の紀貫之、藤原敏行、『新古今和歌集』の西行法師、藤原定家など、光村でも紹介した歌人が中心である。枕詞などの修辭法についても説明がある。『おくのほそ道』も、「旅立ち」の場面を原文と現代語訳で載せ、「平泉」の段は原文のみを紹介している。読み味わうだけでなく、「芭蕉は「旅」をどのようなものと捉えていたのだろうか」といった内容に関する質問もある。『論語』も扱っているが、「君子は和して同ぜず」など、採択箇所は光村とは異なっている。「課題」としては、「現代にも通じる古人のものの見方や考え方を捉える」「訓読文を見て音読ができるように、繰り返し練習しよう」となっている。

三省堂も、『おくのほそ道』は、「旅立ち」と「平泉」の段を採択している。「芭蕉はどのような思いを抱いて旅をしているのだろうか。根拠をあげて話し合おう」という活動が挙げられている。書く活動は、「芭蕉のよんだ三つの句から一つを選び、鑑賞文を三百字程度で書こう」である。「好きな和歌を紹介しよう」という単位では、三大和

歌集の歌が紹介され、音読後は内容を紹介する文章を書き、感想を話し合って交流するという順序で学習を進めることになっている。取り上げられている歌人は、『万葉集』は柿本人麻呂、額田王、山部赤人、山上憶良、大伴家持、『古今和歌集』は紀貫之、藤原敏行、小野小町、在原業平、『新古今和歌集』は西行法師、藤原定家、式子内親王であり、光村や東書と重複している。漢文は、『論語』だけでなく、「中国の古典の言葉」として、「備へ有れば、患ひ無し」（『書経』）「百聞は一見に如かず」（『漢書』）「虎穴に入らずんが、虎子を得ず」（『後漢書』）など、有名な格言や故事成語が紹介されている。

教出の古文も、他社とほぼ同じ扱いである。『おくのほそ道』では、「旅立ち」と「平泉」の段が中心で、その他「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」で有名な「立石寺」も掲載されている。現代語訳が付いているのは、「旅立ち」のみである。学習活動としては、「歴史的仮名遣いに注意して『おくのほそ道』の文章をノートに書き写し、朗読してみよう」とある。また、「学習の手引き」には、「古典の一節を引用した文章を書く」とあるが、例文はない。「和歌の調べ」では、三大和歌集から代表的な和歌を紹介し、それぞれの歌集の作風の違いに言及している。紹介されている歌人は、光村・東書・三省堂とほとんど同じである。学習活動も「歌の意味を考えながら、繰り返し朗読してみよう」というものである。教出は、2年で『論語』を扱ったので、3年では漢詩を扱っている。定番教材が中心で、李白の「黃鶴樓にて孟浩然の広陵に之くを送る」と杜甫の「春望」である。

学図も、2年次に『論語』を扱ったので、3年次は漢詩を扱っている。定番の杜甫の「春望」の他に、王維の「元二の安西に使ひするを送る」と李白の「静夜の思ひ」を紹介している。また、構成に関しても、「それぞれの詩の起承転結の展開を考え、承・転・結の各部分の前に、どのような言葉（接続詞など）を入れるとよいか、話し合おう」となっている。古文の『おくのほそ道』は、定番の「旅立ち」と「平泉」の段を載せているが、

その他に「五月雨をあつめて早し最上川」「荒海や佐渡によこたふ天の河」なども紹介されている。書く活動としては、「気に入った芭蕉の句を選び、その句を引用しながら、芭蕉に一文程度で手紙を書こう」となっている。『枕草子』は3年次に扱い、「春はあけぼの」「うつくしきもの」「香炉峰の雪」を掲載している。

#### 4. 考察

新学習指導要領に「伝統的な言語文化」が加わったことで、以前は中学校の教科書で扱われていた作品の多くが、小学校の高学年を中心に扱われるようになったが、その結果、どのような課題が生じているのか、また指導に当たっての留意点は何かということについて考察したい。

三省堂の国語教育実践研究会（2011）は、小学校と中学校の連続性に配慮し、中学校における古典指導を見直し、教材と学習活動に関して指導方針を打ち出している。まず、教材としては、「小学校でふれたことのあるような作品を含め、古典の和歌や俳句、随筆や物語、漢詩や漢文」を扱い、学習活動としては「音読・朗読を中心として古典のリズムや調べを味わい、情景や心情を想像する活動」を行なうこととしている。当然のことながら、ここに示されている指針は、文部科学省の学習指導要領を逸脱するものではない。また、古典の学習を「知識」「内容の把握」「声に出して読む」「暗唱」に分け、どのようなバランスで授業を行なえば良いかも示している。例えば、「声に出して読む」だが、1年生はハ行転呼音や「ゐ・ゑ・づ・ぢ」、連母音に注意して「音読」し、2年生は「作品の特徴を生かして朗読」し、3年生は言葉のリズムや調子を楽しむことになっている。そもそも、「小学校でふれたことのあるような作品」で良いのかどうか、「音読・朗読を中心」に古典学習を進めて良いのかどうか、原点に立ち返って検討する必要があるのではないだろうか。

まず、一つ目の課題であるが、採択される作品の定番化に伴う弊害が挙げられる。小中学校の「伝統的な言語文化」は、扱う学年に違いはあっ

ても、広く知られた有名な古典文学を中心に採択されるため、作品が定番化していると言って良い。物語であれば『竹取物語』と『平家物語』、随筆であれば『枕草子』と『徒然草』、紀行文であれば『奥の細道』、和歌であれば『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』、俳句であれば松尾芭蕉・与謝蕪村・小林一茶が一般的である。漢文であれば、「矛盾」などの故事成語や、『論語』の一節、孟浩然・杜甫・李白の漢詩が定番である。しかも、先に見たように、それぞれの作品で扱う箇所には偏りがある。

『枕草子』の「春はあけぼの」、『平家物語』の「祇園精舎」、『奥の細道』の「旅立ち」など、有名な古典文学の冒頭部分は、何度も小中学校の教科書に登場してくる。実際は、小中学校だけでなく、高等学校の教科書「国語総合」にも、重複する作品が数多く見受けられる。『国語総合改訂版』（大修館書店）には、『徒然草』の「高名の木登り」、『枕草子』の「春はあけぼの」「雪のいと高うふりたるを」、『奥の細道』は「旅立ち」「平泉」「立石寺」が収録されている。『新精選国語総合』（明治書院）でも、『竹取物語』の「かぐや姫の生い立ち」、『徒然草』や『平家物語』の冒頭部分、『奥の細道』の「旅立ち」と「平泉」が掲載されている。古文だけでなく、漢文にも同様の傾向が認められ、故事成語は「五十歩百歩」「矛盾」「蛇足」が採録され、漢詩は杜甫の「絶句」や「春望」、孟浩然の「春曉」、『論語』も「学びて時に之を習ふ」など既習箇所が多く採択されている。このように同じ作品の同じ場面を繰り返し扱うことで、児童生徒が逆に古典に対して興味を失ってしまわないか危惧される。

二つ目の課題は、学習活動が「音読」に偏っていることである。学習指導要領によると、小学校の第3学年及び第4学年が「優しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること」、第5学年及び第6学年が「親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること」となっている。中学校では、第1学年が「文語のきまりや訓読の仕方を



知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること」、第2学年が「作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむこと」となっているが、同じ作品の音読ばかりで、学習が単調にならないか心配である。しかも、「朗読」との違いも不明である。『国語辞典』（岩波書店、1986年）によれば、「音読」とは「声に出して読むこと」であり、「黙読」の対義語である。一方、「朗読」とは、「声をあげて詩歌や文章をよむこと」となっている。辞書の説明も明確ではないが、学習指導要領の区別も不明瞭で、英語版を見てみると、「音読」と「朗読」には区別がなく、いずれも **reading aloud** である。同様に、中学2年生の「古典の世界を楽しむ」も、3年生の「その世界に親しむ」も、英語版では **enjoy the world of classic literature** となっており、これでは、学年ごとに目標を別々に設定する意味がない。勿論、古典を学習する上での音読の重要性は、十分に認識しており、否定しているわけではない。ただ、学習指導要領には曖昧な記述も少なくなく、「音読」と「朗読」の違いがどの程度認識されているのか、疑問に思うところである。

三つ目は、教科書によって学習活動が異なっている点である。先にも触れたように、小中学校の「伝統的な言語文化」は、「音読や暗唱」或いは「朗読」が中心である。そのため、内容を深く考えさせる教科書も見受けられる一方で、作品の音読に終始している教科書もあって、「伝統的な言語文化」に対する扱いは様々である。また、俳句や短歌、ことわざや慣用句など、扱っている分量が教科書によって異なっている点も見過ごせない。学図の中学1年では、定番の『竹取物語』や「矛盾」を扱っているが、内容について深く考えることを要求している。古典を理解する上では、単なる作品の「音読」ではなく、何に注目して読み、本文の何について考えれば良いか学習の手掛かりになる設問が必要である。

逆に、古典の学習に留まらず、「ことわざブック」（東書4上）を作ったり、『枕草子』風の随筆（学図5上）を書かせたりと、四技能と結びつけた

活動を積極的に取り入れている教科書もある。例えば、東書6下だが、福澤諭吉の『学問のすゝめ』を学習した後、「名言集」を作成するように指導しており、教科書には、取材カードのサンプルや、分類の仕方、見出しのつけ方などが具体的に説明されている。活動には、インタビューやスピーチなども含まれ、話す・聞く・書くといった作業が複合的に組み合わされている。小中学校の書く活動では、手書きを前提としているようだが、動機づけの面からは、パソコンなどの機器を活用することも考慮すべきである。

四つ目は、学習内容の積み上げと連続性の問題である。高等学校の学習指導要領は、「伝統的な言語文化」に関して、二つの目標を掲げている。一つ目は「言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について気付き、伝統的な言語文化への興味・関心を広げること」であり、二つ目は「文語のきまり、訓読のきまりなどを理解すること」となっている。そのため、高等学校では古典文法の学習が中心になりがちである。文法に関しては、中学1年生でも、「文語のきまりや訓読の仕方を知り」となっているので、古典文法を学習する機会もある。ただ、古典文法の何を中学で扱い、何を高校で学ぶのかは明確になっていない。また、小学校では四技能を活用した活動もあったのに、学年が上がるにつれて文法事項が中心になり、せっかく小学生の頃から古典に親しみながら、高校生になった途端、古典離れにならないかが気がかりな点でもある。

今後は、小学校から高等学校まで、「伝統的な言語文化」の学習内容を連続したものとして捉え、カリキュラムや教材を考えていくべきである。例えば、同じ作品であれば、小学校では原文の音読を行ない、中学校では現代語訳を使って内容について深く考え、高等学校では再び原文を読んで古典文法について学習するというような、重層的で発展的な取り組みが必要である。古典文学の同じ作品の同じ箇所を、同じ方法で何年間も学習するようなことだけは避けたい。重複がすぎると学習が退屈なものになりやすい。有名な古典文学を学ぶことは大切だが、既習の内容を吟味し、学年が



進むごとに新しい作品を積極的に取り入れるようにすべきである。

## 5. おわりに

今回、小中学校の教科を分析して、同じ「伝統的な言語文化」という事項でも、教科書会社によって扱い方に違いがあり、授業をする上で注意が必要であることが分かった。教員は、現場で使用する1社の教科書だけでなく、他社の教科書の内容にも目を配り、指導方法や指導案作成などの参考にすべきである。特に、小学校の教員は中学校の、中学校の教員は小学校と高等学校の「伝統的な言語文化」に内容について知っておくことが重要である。現行の教科書の採択率は、光村が小中学校とも6割強であるが、小中学校で教科書会社と同じであるとは限らず、また同じ教科書会社でも小学校と中学校とは編集委員が異なることもあり、小中学校の内容の連続性に留意する必要がある。

本稿では、義務教育課程に当たる小中学校の新学習指導要領と、それに準拠する国語教科書における「伝統的な言語文化」の扱いに関して、内容の分析と考察を行なったが、高等学校でも2013年度から新学習指導要領が全面的に実施されることになっており、今後は高等学校の国語教科書についても分析してみる必要がある。特に、新学習指導要領では、『国語総合』が必修科目となるため、『国語総合』の古文・漢文と中学校までの「伝統的な言語文化」の内容の重複に関して、生徒が同じ作品ばかりを学習して古典に飽きてしまわないような工夫が必要である。小学校から高等学校までを連続した学びとして「伝統的な言語文化」を考えるべきであり、学習指導要領には、それぞれの課程でどのような学習活動が行われるべきなのかをより具体的に明示すべきである。

## 参考文献

学校図書株式会社HP  
<http://www.gakuto.co.jp/>  
(2012年9月5日)

- 教育出版HP  
<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>  
(2012年9月5日)
- 高等学校学習指導要領「国語」  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_\\_icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304427\\_002.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304427_002.pdf)  
(2012年9月5日)
- 国語教育実践研究会編 (2011)『小中の接続を見通した「古典」授業』三省堂, pp.5-7
- 三省堂HP (教科書)  
<http://tb.sanseido.co.jp/>  
(2012年9月5日)
- 小学校学習指導要領「国語」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/koku.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/koku.htm)  
(2012年9月5日)
- 小学校学習指導要領英訳版 (仮訳)「国語」  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_\\_icsFiles/afieldfile/2009/04/21/1261037\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afieldfile/2009/04/21/1261037_2.pdf)  
(2012年9月5日)
- 中学校学習指導要領「国語」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/koku.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/koku.htm)  
(2012年9月5日)
- 中学校学習指導要領英訳版 (仮訳)「国語」  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_\\_icsFiles/afieldfile/2011/04/11/1298356\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afieldfile/2011/04/11/1298356_2.pdf)  
(2012年9月5日)
- 東京書籍株式会社HP (教科書・教材)  
<http://ten.tokyo-shoseki.co.jp/kyozai/menu.html>  
(2012年9月5日)
- 「2011年度小学校教科書採択状況—文科省まとめ」  
(2010)『内外教育』6045号, 2010年12月17日発行, 時事通信社, pp. 10-11
- 「2012年度中学校教科書採択状況—文科省まとめ」  
(2011)『内外教育』6125号, 2011年12月2日発行, 時事通信社, pp. 6-7
- 光村図書出版社HP (教科書・副読本)  
<http://www.mitsumura-tosho.co.jp/kyokasyo/>  
(2012年9月5日)
- 『読んでおきたい名著案内 教科書掲載作品 小・中学校編』(2008)日外アソシエーツ

## 使用した教科書

- 〈小学校〉  
学校図書『みんなと学ぶ 小学校 国語』全学年 (2011年2月10日発行)
- 教育出版『ひろがる言葉 小学国語』全学年 (2011年1月20日及び6月10日発行)
- 三省堂『小学生の国語』『小学生の国語 学びを広げる』

全学年（2011年2月25日発行）

東京書籍『新しい国語』全学年（2011年2月10日及び7月10日発行）

光村図書『国語』全学年（2010年3月16日及び2011年6月5日発行）

〈中学校〉

学校図書『中学校 国語』全学年（2012年2月10日発行）

教育出版『伝え合う言葉 中学国語』全学年（2012年1月20日発行）

三省堂『中学生の国語』『中学生の国語 学びを広げる』全学年（2012年2月25日発行）

東京書籍『新しい国語』全学年（2012年2月10日発行）

光村図書『国語』全学年（2012年2月5日発行）

〈高等学校〉

大修館書店『国語総合 改訂版』（2008年4月1日発行）

明治書院『新精選 国語総合』（2009年1月20日発行）